

ティーチング・ポートフォリオ

菱田 信彦

(記入日：2024年2月26日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

科目名	年次	期間	必・選	単位
英語 I (1) 〈F クラス〉	1	前期	必修	1
英語 I (2) 〈F クラス〉	1	後期	必修	1
国際コミュニケーション (イギリス研修)	1	集中	選択	2
総合講座 (3) (コーディネーター)	1	後期	選必	2
基礎ゼミナール 〈B クラス〉	1	前期	必修	1
イギリス文化史 (1)	1	前期	選必	2
イギリス文化史 (2)	1	後期	選必	2
英語文学演習	2	後期	選必	2
リサーチ&プレゼンテーション	3	前期	選必	2
国際文化特講 V (第 5 回より代講)	3	後期	選必	2
セミナー	3	通年	必修	4
卒業研究	4	通年	必修	6

※2023年度は履修者がなかったが、大学院科目も担当

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生がイギリスのオックスフォードで 3 週間の語学研修を行う「国際コミュニケーション (イギリス研修)」では、イギリス人の文化や価値観が日本人とどのように異なるかを意識させた上で、オックスフォードに関するリサーチとプ

プレゼンテーションをさせた。帰国後には日本人と他国人との文化的違いなどをテーマに英語でスピーチを行わせた [エビデンス 1]。

「基礎ゼミナール」では、資料の収集や分析、文献の要約、それをもとにしたプレゼンテーションなど大学での研究活動の基礎を身につけさせるとともに、自分の立場を明確にした上で意見を述べ、他の意見に対して質問やコメントを行う、ということを経験させるよう努めた。「英語文学演習」ではイギリス、カナダ、アメリカなど英語圏諸国のよく知られた児童文学作品を、それらが書かれた時代の文化的・社会的背景をふまえて読解することにより、作品がその時代のジェンダー、階級、民族などの問題をいかに反映しているかに目を向けた。

「リサーチ&プレゼンテーション」では、社会的問題について英語でリサーチとプレゼンテーションを行う際の基礎を身につけさせるとともに、問題に対する賛否や優劣の判断を明確に示そうとする英語圏の人々の価値観を意識させた。「セミナー」ではイギリスの児童文学作品に関する英語論文の一部を講読させ、作品の書かれた時代の社会背景がいかに作品に影響しているかをディスカッションした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

大学での学修に欠かせないリサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げたと考えている。とくに「リサーチ&プレゼンテーション」では、リサーチテーマの設定のしかたに始まって、テーマに沿った資料の探し方やその評価と選別、またプレゼンテーションの「コア・ストラクチャー」の構成のしかた、論を進めるための「ディスコース・マーカー」の使用法、さらに画像資料の提示や他者のプレゼンテーションの評価するポイントに至るまで、英語によるリサーチとプレゼンテーションの基本を教え、実践させることができた。また、履修者がいずれも障がいをもつ児童・生徒に対するインクルーシブ教育に関心を抱いていたため、学生が自分でどんどん資料を探して考察を進めてくれ、プレゼンテーションの内容に関する教員の介入を最小限にとどめるという方針が実現できた。学生が作成したプレゼンテーションのストラクチャーや原稿には、意見を述べ、またそのために自分の立場を明らかにするとは具体的に何をすることなのか、ということをめぐる彼女らが苦闘した経緯が見てとれる [エビデンス 2]。

その一方、「イギリス文化史 (1) (2)」「英語文学演習」のような文化的題材を中心とする科目では、私の講義および文献や作品の講読が中心となり、学生が発言する機会が少なくなりました。それを補うためこれらの授業では毎回 Forms を利用したコメントシートを設定し、授業内容の要約とそれに関する自分の意見や感想を書いてもらい、教員からフィードバックを行った [エビデンス 3]。

5 今後の目標（これからどうするか）

文化的な題材を扱う授業でも、学生がより積極的に学修できる工夫が必要である。たとえば「イギリス文化史 (1) (2)」では、学生がイギリスの文化や歴史に関することがらの中から自分でテーマを設定し、リサーチした上で教室で発表するようとり組みを行うことが考えられる。教材についても、これまではプリントやパワーポイント資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 「国際コミュニケーション」英語スピーチ原稿（非公開）
- 2 「リサーチ&プレゼンテーション」コア・ストラクチャーおよびプレゼンテーション原稿（非公開）
- 3 「イギリス文化史 (1) (2)」および「英語文学演習」コメントシート（非公開）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

アメリカ、国際関係：アメリカ文化史(1)(2)（1 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化演習(2)（2 年次以上：選択必修 2 単位）、国際文化特講 II（3 年次以上：選択必修 2 単位）、国際関係入門(1)(2)（1 年次以上：選択必修 2 単位）

英語関係：リスニング I（1 年次：必修 2 単位）、リスニング III（3 年次以上：選択必修 2 単位）など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

アメリカ、国際関係：他国に関する知識をさまざまな角度から伝えることによって、学生の目を世界に向けさせるとともに、教養を深め、異文化理解の楽しさや難しさを認識させることを目標としている。

英語関係：ニュースや学術的な題材を扱った英文を繰り返し聞き、そこに出てくる語彙を増やすことで、TOEIC などの資格試験に対応できるリスニング力を伸ばしていくことを目的としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

アメリカの歴史を文化、社会を中心に建国期からたどるアメリカ文化史(1)(2)では、写真を見せたり、映像を使ったりして、学生に興味を持ってもらうよう工夫をしている。また、パワーポイントの資料をそのままプリントアウトして配るのではなく、レジュメを用意し、教員が示す重要な点を学生が自分で記述するよう促す形をとっている。

国際文化演習(2)では、大統領の英文スピーチを毎回訳させて英語力の向上を図るとともに、その社会背景を写真や動画を使って説明している。また、複数の大統領のスピーチを比較し、諸問題に関する捉え方の違いなども示している。例えば、今年度は黒人問題に関するオバマとトランプ、また民主主義に関するトランプとバイデンの考え方の違いなどに焦点を当てた。予習をした訳を各自発表させるという点では、学生が主体的に関わっている授業であるといえる。学生の反応をきちんと把握し、理解が難しいと思われる点はきちんと板書して細かく説明をしている。また、実際に大統領がスピーチしている映像を見せて、心に残るスピーチはどのようなものかを学生に考

えさせたりしている。

国際文化特講 II では、アメリカ社会を構成する人々が現在どのような状況に置かれ、「主流の」アメリカ文化でどのように表象されているかを示すために映画を多用している。各回で取り上げた人種が持つ歴史的背景も詳しく説明し、どのような背景のもとにステレオタイプの描写が行われているのかも説明する。さらに、アメリカ映画における日本人表象を歴史的に追うことで、日米という国の関係が文化にどのように反映しているかも示している。また、扱う内容が現在のニュース等と関連付けられる場合は、できるだけ言及し、学生が時事問題に興味を持つよう促している。さらに、本授業では、学生に考えさせ、学生同士で話し合い、発表させることに重点を置いている。

国際関係入門(1)(2)では、国際関係を知るための基礎知識として、さまざまなトピックについて歴史的背景から説明している。また、それぞれのトピックに関する新聞記事を毎回授業で配り、読ませることによって、時事問題に興味を持たせるとともに、新聞記事で見られる硬い文章に慣れてもらうようにしている。また、学期の終わりには各学生に新聞記事を探し、その記事を要約、発表させることでプレゼンテーション力の向上を目指している。

リスニングの授業では、クラスの中でのリスニング力に差があることを念頭に置いて、クラス全体に一斉に音声を流すのではなく、各々のタブレット、パソコン、あるいはスマホを使い、繰り返し英語を聞くようにさせている。また、答え合わせをする前に、より小さなグループで答えを比較し、合わなかった点についてはその差異がなぜ出ているのかを話し合わせることによって、英語リスニングには文法的な知識も有効であることを自覚させるようにしている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

大学の授業評価アンケートの視聴覚資料を含めた教材の利用は効果的であるかとの問いに、アメリカ文化史(1) [2023 年度前期]、国際文化特講 II [2023 年度後期]では 76%、国際文化演習(2) [2023 年度前期]では 85%の学生が「そう思う」と答えた（「どちらかというと思う」を含めればすべての授業で 100%となった）。

リスニング III [2023 年後期]では、82%の学生が授業内容に触発され、もっと勉強したいという気持ちになったと答えている。生のニュース英語を聞き取ることは難しかったと思うが、少し難しいことを行った結果、勉強意欲が刺激されたのだと考えられる。また、自由記述欄には、英文を何回も聞くことによってだんだんわかるようになることを実感したというコメントも見られた（エビデンス 1）。

5 今後の目標（これからどうするか）

今年度は、机間巡視をしつつ授業中での学生とのやり取りを増やしてみたのだが、グループワークがある国際文化特講Ⅱやリスニング、また、学生が発言する機会が多い国際文化演習(2)ではうまくいったと思う。また、グループワークをさせることによって学生の意識が高まるということも実感した。しかし、アメリカ文化史や国際関係入門などの講義系の授業では、なかなか学生の間に入っていき機会がなく、学生の顔を見て理解度を図ることが中心になってしまっていた。今後の履修者の人数によっても変わっていくと思うが、このような授業でもグループワークを増やしたり、リアクションペーパーを活用したりして、よりインタラクティブな授業を行いたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス1：2023年度授業評価アンケート結果（非公開）

エビデンス2：授業内で配布するレジュメ（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 佐藤 翔馬

(記入日：2024年2月21日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

英文法 I (1年次：必修2単位)、ライティング I (1年次：必修2単位)、言語コミュニケーション特講 II (3年次以上：選択必修2単位)、英語 I (1)/(2) (共通教育科目、1年次：必修1単位)、英語 II (1)/(2) (共通教育科目、1年次：必修1単位)、など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

言語学や第二言語習得論に関する授業については、教師による一方的な講義だけではなく、問題演習、ペアワークやグループワーク、ディスカッションを取り入れることで、当該分野に興味を持ってもらうとともに、なるべく身近に感じてもらうことを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

言語コミュニケーション特講 II では第二言語習得論を取り扱った。第二言語習得論も多くの受講者にとって未知の学問であり、教職課程の履修者もほとんどいなかった。そのため、個人課題だけでなくグループワークを通して理論や仮説を自分の立場に置き換えて考えるとともに、他者の意見に耳を傾けることで、第二言語習得論を少しでも身近に感じてもらえるよう努めた。課題は必ず紙面にまとめてもらったうえで回収し、講評しつつ返却した (エビデンス 1)。また、講義資料としてパワーポイントを使用した。使用した資料はオンライン上にアップロードし、受講者がいつでも復習に利用できるようにした (エビデンス 2)。

英語 II (1)/(2) では英語の長文を精読したが、難易度が高い長文であったこともあり、グループに分かれて話し合いながら日本語訳を考えてもらった。精読の授業では、受講者が日本語訳を書き写すだけで手いっぱいになってしまい、語彙や文法にまで気が回らなかったり、ただ日本語訳を丸暗記するだけになってしまったりするおそれがある。そこで、グループで話し合った日本語訳を発表

してもらい、その日本語訳に修正や解説を加えつつ、即時に担当者がオンライン上のファイルに打ち込むことで、受講者が自身の端末でその日本語訳を見ながら授業を受けたり、復習に利用したりできるようにした（エビデンス 3）。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

言語コミュニケーション特講Ⅱでは、授業評価アンケートとは別に匿名のアンケートを実施した。授業のよかったところとして、「課題を通して内容をより深く理解できた」「課題に取り組むことで理解度が把握できた」、「グループワークを通して他の人の意見を聞くことができた」、「グループワークで難しい課題をみんなで考える機会があった」といったように、個人課題やグループワークを評価する意見が見られた（エビデンス 4）。また、アンケートに回答したすべての受講者が第二言語習得論に対する理解が「とても深まった」もしくは「まあまあ深まった」と回答した（エビデンス 4）。さらに、「講義資料がわかりやすかった」という意見も見られた（エビデンス 4）。

英語Ⅱ(1)/(2)では、受講者たちが日本語訳を書き写すことに気をとられすぎず、語彙や文法についての解説を聞き、積極的にメモをとる様子が見られた。これは、自身の端末で日本語訳をいつでも確認することができるため、聞き逃してしまうおそれなくなったためであると思われる。

5 今後の目標（これからどうするか）

言語コミュニケーション特講Ⅱで提出された課題を見てみると、授業の内容をほとんど理解できていないと思われる受講者もいた。個人課題やグループワークの最中には机間巡視を心がけていたものの不十分であり、すべての受講者に目が行き届いていなかったためにこのような結果になったと考えられる。今後はできる限り受講者一人一人の理解度を意識し、講義資料をよりわかりやすいものにするよう心がけたい。

英語Ⅱ(1)/(2)は「教員相互の授業参観」の対象となったが、他の教員の意見として「もっと学生の様子を見たほうがよい」というものがあった。事前の準備などを通して、オンライン上のファイルに打ち込む作業に集中しすぎず、学生の様子をうかがいながら授業を進められるよう注意したい。また、この授業に限らず、受講者に自身のデバイスの使用を許可する授業では、授業中に受講者が翻訳サービスや生成 AI を使用してしまうおそれがある。受講者の能力向上の

妨げにならないよう、安易に翻訳サービスや生成 AI を使用しないよう指導したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス 1：言語コミュニケーション特講Ⅱ 受講者の提出物（非公開）

エビデンス 2：言語コミュニケーション特講Ⅱ 講義資料（非公開）

エビデンス 3：英語Ⅱ(1)/(2) オンライン上のファイル（非公開）

エビデンス 4：言語コミュニケーション特講Ⅱ 匿名のアンケート（非公開）